

宮崎県木材利用技術センター



「これからの木造建築はパルサ材で構造を考える時代に入る。」先日しまね木造塾で宮崎県木材利用技術センターを訪ねた際の飯村豊所長のお言葉でした。日本一の杉生産量を誇り、また産地として最南端にあり、年輪の大きな木をもって市場経済の中で林業県として生き残りをかけ研究をなされている。その中で建築用材として夏目と冬目の比重を比較し 0.2 : 1.2 となり前出のとえになるようである。地球温暖化・富栄養化により日本で植林された杉材はこのような傾向にあると言えるようです。また、植林から 50 年を超え伐採期を迎え、いわゆる中径材・大径材が市場で出回るにつれ、供給された材の特徴を生かしながら木割を考え、また乾燥技術を確立され建築用材として新しい顔をもった杉材の登場となるようである。

大径木の芯さり製材による柱と調弦梁とを一般認定金物を用いた仕口は、これまでの集成材の利用の金物工法を覆す試みで、今後の一般材利用の大型建築の促進に寄与するものと思われ、その技術を我々木造塾に開示して頂いたこと、飯村豊所長の大きさに感激いたしました。

木材利用技術センターの建築もアルゼッド建築研究所・稲山正弘氏の作品で、構造の妙味とバランスのよい空気感をもった作品であった。

村上 修二

